

文学館だより



令和 7 年 6 月 1 日
若山牧水記念文学館
TEL 0982-68-9511
文 貴 日 高 第 110 号

= 若山牧水生誕140年・若山牧水記念文学館開館20年Memorial Year =

若山牧水生誕140年記念 / 若山牧水記念文学館開館20年記念 郷土の歌手小田加奈子が 郷土の歌人若山牧水を歌う 小田加奈子コンサート 会場が温かく包まれて(*^▽^*)

若山牧水記念文学館初の試み、「文学館でコンサート ㊦」を開催いたしました。今年が牧水生誕 140 年であること、更には文学館開館 20 年であることから、ここ牧水のふるさと坪谷で開催したいという強い思いをもって準備を進めてきました。大ホールがあるわけでもありません。ポスター、チケットもすべて手作り。我々の思いを受け取り引き受けてくださった小田加奈子さん、すてきなコンサートをありがとうございました。



文学館がコンサート
会場に \(\odot\odot\odot\)/



80 名を超えるお客さ
まが聞き入りました
(スタッフ含む)



ピアノ伴奏
河野浩子さん(左)

5 月 25 日(日) 13:00 コンサート開演

開会の後、牧水を知ってもらおうと牧水クイズに挑戦。

【第 1 問】 若山牧水は明治 18 年 8 月 24 日、牧水生家で生まれました。
生まれた場所はどこでしょう？

A 居間 B 縁側

【第 2 問】 牧水は生まれた日のことを歌に残しています。
空欄「 」に入る言葉は何でしょう？

おもいやる かのうすあおき かいのおくに われのうまれし「 」のさびしさ

A 里(さと) B 朝(あさ)

【第 3 問】 牧水の母の名前は何でしょう？

A マキ B 喜志子

【第 4 問】 牧水は「酒のうた」をたくさん詠んでいます。
全部で何首詠んでいるでしょう？

A 約 150 首 B 約 350 首 C 約 550 首

【第 1 問】 B 【第 2 問】 B 【第 3 問】 A 【第 4 問】 B
会場の全問正解者は 15 名でした。

マイクが小田さんに渡し、いよいよ開演。

しらとり
「白鳥の歌」から幕が開きました。しらとり
みなさんは古関裕而(こせきゆうじ)作曲の「白鳥の歌」をご存じでしょうか。
1 番 白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ
2 番 幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく
3 番 いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこの寂しさに君は耐ふるや
に曲を付け、昭和 22 年に発売されています。

続いて、当時の牧水顕彰会が牧水を偲んで作ったと言われている「坪谷慕情」。
途中小田さんのオリジナル曲を挟み、7 曲目に、さだまさし作詞作曲の「あこがれ」。牧水の「けふもまた心の鉦をうち鳴しうち鳴しつつあくがれて行く」に感銘を受けたさださんが詩を書き、曲を付けた 1 曲です。この「あこがれ」については、「文学館だより 令和 7 年 2 月号 第 106 号」で紹介いたしました。よろしかったらご覧ください。

そしてアンコール。「白鳥の歌」をもう一度。そして、「ふるさと」の 2 曲を会場全員で合唱。
牧水先生のこと、ふるさと坪谷のこと、
「白鳥の歌」との出会いを大切に話してく
ださった小田さん。艶ある小田さんの歌声
に会場が温かく包まれて、うっとりしたひと
ときでした。

伴奏譜のないところご苦労をおかけした
河野浩子さん、ありがとうございました。



この日のために
新調したドレス
で熱唱

第14回若山牧水顕彰全国大会—しまなみ・ゆめしま大会— 開催

昨年のプレ大会に続き、若山牧水顕彰全国大会が愛媛県今治市で開催された。私は昨年参加させてもらった。「文学館だより 令和6年6月号 第98号」を読み返してもらえるとありがたい。



第14回若山牧水顕彰全国大会—しまなみ・ゆめしま大会—

- 1 開会
- 2 シンポジウム 1 部 (後述)
- 3 シンポジウム 2 部
「短詩計の過去と未来—牧水・山頭火・放哉から考える—」
司会 土岐友浩 パネリスト 大森静佳、佐藤文香、山口遼也
- 4 岩城島 (いわぎじま) クルー ジング

ここでは、シンポジウム 1 部について報告する。

牧水第六歌集『みなかみ』をとことん論じる — 定型と韻律をめぐって —

司 会 伊藤一彦 (歌人、若山牧水記念文学館館長)
パネリスト 大森静佳 (歌人) 土岐友浩 (歌人、精神科医)

【大森氏】「牧水は“あてのなさ”を求めた歌人。自然と自分の境界があいまいで、“われ”に空洞 (すきま) がある。しかし、苦境の中で詠まれた『みなかみ』の歌は、その苦しさゆえ、心のゆとりがなくなっている。牧水らしくない歌集だが、牧水全体として見ると、牧水の試作が感じられる。」

【土岐氏】「短歌は“対話”であり、牧水は自然と対話をした歌人。自然を歌いながら自分の心を歌ってきた。『みなかみ』の破調の歌に多く見られるリフレインも対話を示したものであり、場面そのものが定型では書けなかった故の破調。」

【伊藤氏】「長男なのに家を継がない自分を忸怩 (じくじ) たる思いで見ている。家と自我の問題にぶつかり、身を小さくしている。『みなかみ』の歌はその苦悶を歌にしている。韻律の面から見ると、リフレインをうまく使ってリズムを作っている。」

以上、出張報告より転記。

詳細は全国牧水顕彰会会報の報告を待つこととしたい。

若山牧水しまなみ顕彰会のみなさま、2年に及ぶ全国大会、お疲れさまでした。



シンポジウムの伊藤先生



岩城郷土館

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

家のうちれのうへの紫陽花のうすら青みのつる真昼日

いえのうち つくえのうへの あじさいの うすらあおみの つるまひるび

大正 4 年の夏、神奈川県三浦半島・北下浦海岸 (横須賀市) での詠草。喜志子夫人の転地療養のため北下浦に転居している時の歌。牧水 30 歳。第八歌集『砂丘』に収められ、「夏日哀愁」の詞書のもと、7 首が詠まれている。

夏の朝ややに更けゆきわがこころ離ればなれに疲れたるかな
夏草の花のくれなゐなにとなくうとみながらに挿しにけるかな
うす藍のいまは褪 (あ) せなむあぢさゐの花をまたなくおもふ夕暮
あぢさゐやこよひはなにか淋しきに立ち出でて雨をあふぐ夜の庭
わだつみの荒磯 (ありそ) の貝をとり来り殻砕きつつさびし昼空
潮ぐもりこの貝あまり新しく磯くさくして食べがたきかな

当時、喜志子夫人が詠んだ歌には次の歌がある。

梅雨どきの雨のたえまの夜 (よる) ふけて風吹く中に遠蛙きく

初めてのんびり、ゆっくりした生活が送れると思っていたものの、これまでの疲れが出たものなのか仕事らしい仕事の手につかなかったようである。

牧水先生、少しは気分一新できたのでしょうか。